

学校経営のポイント

児童・生徒を元気づける“評価”と“教育方法”

若井 彌一

新学年度が始まった。この「教職研修資料」が配信される4月10日には、どこの学校でも入学式が済んで、授業が開始されていることであろう。

最近、また、わが国の児童・生徒が自己肯定感をもてないという現状についての報道がなされた(4月5日『朝日新聞』)。今回は、それに関連して、全国の教育関係者に呼びかけをしておきたい。

“入園式”で保護者をお願いしたこと

私事に及ぶが、4月7日に本学の附属幼稚園の入園式に招かれて祝辞を述べた。3～4歳児に祝辞を述べるには少々工夫が必要であるが、本題ではないので省略する。

短い祝辞であったことは当然であるが、終わりの部分で、保護者の方々に「集団生活にすぐに適応できなくても、焦らないでください」「小さな子どもたちですから、ときにはケンカもしますが、そうして人間の資質を身につけていくんだと思って、精神的ゆとりをもって見守ってください」「一人ひとり、違ってよいのです。違うからこそ、おもしろいのです」という趣旨のことを述べ、「早咲きも 遅咲きもみな それぞれに 違いこそあれ 花うつくしき」の短歌で結びとした。

園の周囲は、早咲きのさくらが咲き始めている。遅咲きのさくらは 早咲きのさくらが散ったところに、われわれの目と心を楽しませてくれる。花だけではない。人間もそうである。

わが国の子どもたちの多くが自己肯定感をもてないという現状は、看過してはならない重要な取り組み課題ではないか。ほぼ1年前の地方新聞に「〔記者室〕自己肯定感を育てる」という見出しで、「日本の子どもは自己肯定感が低い。ある講演会で、講師

が調査結果を紹介した。自分は大事にされている、社会で有意義に過ごせると感じている子どもの割合は、米国と中国が80%なのに対し、日本は30%。日本の子どもが日ごろから否定的な言葉をかけられている表れだそうだ(後略)」という記事が掲載されている(平成20年3月20日『伊那毎日新聞』)。

子どもを元気づける“評価と方法”の工夫

上掲の引用部分の下線を施した部分(筆者)を裏づける全国的調査があるのかどうかは定かではないが、わが国の子どもたちが、自己肯定感に関して低位にとどまっているのは、これまでの調査、たとえば「教育課程の実施状況調査」の一環として行われている児童・生徒の意識調査の結果でも確認されてきたことである。

教育的によく工夫された競争的学習活動は、一定の範囲で効果を発揮するであろう。しかし、学校での学習が常にテスト(小テストであろうと、中間・期末テストであろうと)でのみ確認され、その結果が、クラスや学校内のみであったとしても、順位づけられて発表されるという繰り返しでは、相対的に順位の下位の者はおそらく自信を失い、繰り返されるテストの重圧に苦しむことになっていくことになりやすい。

「評価」の重要性は、いまさら解説するまでもない。しかし、教育活動における評価は、それ自体が最終目的というよりも、効果的な教授・学習活動を促すための手段的性格を有するものである。評価の対象とされる児童・生徒が評価によって萎縮したり、自信喪失したりすることにならないよう、各学校では評価方法の工夫を重要課題として試みたいものである。

(わかい・やいち=上越教育大学長)

●最新刊好評発売中！ 高階玲治【編】 B5判 180頁・定価2,520円 教育開発研究所

『移行措置を乗りきる学校経営全課題』

■好評発売中！ 免許状更新講習、「指導改善研修」、新教育課程への移行等の対応は万全か！

『教員の養成・免許・採用・研修』若井彌一編著 A5判 370頁 定価3,570円